

史記黃帝內傳鍾繇疏皆云黃帝採首山之銅鑄鼎於荆山此鼎之始也後至夏禹復鑄以象物白氏六帖黃帝作鼎三象天地人禹收九牧之金以鑄九鼎

〔下學集〕器財鼎或作鼎

〔東雅器十用〕鼎アシガナへ 倭名鈔に説文を引て鼎は三足兩耳和五味之寶器也讀みてアシガナ

へといふと注せり鼎讀みてアシガナへといふが如きは古訓にはあらず古には竈を呼びてカ

マと云ひ釜を呼びてカナへと云ひ鼎を呼びてはアシガナへといひけり釜をカマといひ竈を

カマドといひ鼎をカナへと云ふが如きは後の俗に出でしなりアシガナへといひしは其三足

あるが故なりカナとは金也銅鐵之總名也へとは上古之俗凡器を呼びし總名也嚴釜讀てイツ

べといひ忌釜讀みてイムべと云ひ火釜讀みてホノへといひ塙をナべといひ罐をツルべとい

ふが如き皆是也後これに倣ふべし古語に凡物の間隔あるをヒといひけり日本紀に間讀みて

リ鼎釜の屬を呼びてへといひしは其水火之間にあるをヒまた轉じてへといひメとも云ひけ

屬をカメといふ其義を取る事亦然り間隔の字後にヒマヘダチなどよむ又此義にてあるなり

〔日本書紀〕景行二年三月戊辰立播磨稻日大郎姫○註爲皇后后生二男第一曰大碓皇子第二曰小

碓尊○中是小碓尊亦名日本童男童男此云烏具奈亦曰日本武尊幼有雄略之氣及壯容貌魁偉身長一丈

方能扛鼎焉

〔日本書紀通證〕景行方能扛鼎中略倭名鈔中略和名阿之賀奈倍又

史記項羽本紀項籍者卞相人也○中籍長八尺餘方能扛鼎才氣過人雖吳中子弟皆已憚籍矣

〔日本書紀〕天智二十七年十年是歲○中大炊省有八鼎鳴或一鼎鳴或二或三俱鳴或八俱鳴

〔大安寺伽藍緣起并流記資財帳〕合釜參拾參口銅十口之中一口足釜一口懸釜一口行甕鐵

〔續修東大寺正倉院文書〕四十一用冊六貫百七十三文略

百五十文足釜一口直略

百五十文足釜一口直略